

## William Golding : *Lord of the Flies*

における内なる悪と樂園喪失について

鈴木敬子

William Golding (1911— ) の *Lord of the Flies* (1954) は、少年たちの一団が、戦争の最中イギリスから疎開する途中に、敵の砲撃を受けて、とある南海の孤島に不時着するところから始まり、その島での少年たちの生活を描いたものである。故に、形式的にいえば、少年漂流物語とも言えようが、単にその一言で片づけられないところに、この作品の主題が隠されていると言えよう。この作品における無人島での少年たちの生活は、従来の漂流物語のおそらくどの作品よりも、苛酷で凄まじいものとなるのである。

少年たちが不時着した島は、幸いにも、気候も快適で果実も豊富にあり、人間が生活するに十分過ぎるほどの条件を備えていた。彼らは、ほら貝を見つけ、それを吹いて皆を招集した Ralph を chief に選び、rule を作り、事あるごとに集会を開くという、秩序ある生活を始める。Ralph は、初めて皆を招集した時、次のように言う。

“ But this is a good island.....There’s food and drink and ——”

...

“ While we’re waiting we can have a good time on this island.”

...

“ This is our island. It’s a good island. Untill the grown-ups come to fetch us we’ll have fun.”<sup>1)</sup>

この Ralph の言葉に表わされているように、彼らは、まさに地上の楽園とも言えるこの快適な島で、大人の干渉を受けることのない自分たちだけの楽園を築き、自由な共同生活を満喫しようと、期待に胸を膨らませていたのである。すなわち、彼らはこの時、大人の監視のもとを離れたことにのみ有頂天になっていたのであり、同時に彼らが、大人の保護のもとに安全を保障されている一種のシェルターとしての世界から放り出されたのだのいうことには、全く気づいていなかったのである。果たして、rule は次第に形だけのものとなって行き、秩序は乱れ始める。逸早くそれに気づいた Ralph は、早速集会を開き、次のように語る。

“ Things are breaking up. I don't understand why. We began well ; we were happy. And then ——”

...

“ Then people started getting frightened.”<sup>2)</sup>

文明生活によって培われた常識を十分に身につけている、モラリストの Ralph には、彼らの共同生活において、秩序が保たれない理由が理解できなかつたのである。しかし、彼らが得体の知れない恐怖に取りつかれていることには、以前から気づいており、また彼自身としても、全くその恐怖に無関心でいられたわけでもなく、それを、共同生活がうまく行かなくなった原因として、まず第一に考え始めていたのである。その得体の知れない恐怖を真先に感じ取ったのは、六才ぐらいの小さな少年であった。

“ He wants to know what you're going to do about the snake-thing.”

Ralph laughed, and the other boys laughed with him. The small

boy twisted further into himself,

“ Tell us about the snake-thing. ”

“ Now he says it was a beastie. ”

“ Beastie? ”

“ A snake-thing. Ever so big. He saw it. ”

“ Where? ”

“ In the woods. ”<sup>3)</sup>

この会話は彼らが不時着してまもない頃になされたものである。この時は、誰もこの小さな少年の言うことを信じず、彼の言っている ‘beastie’ あるいは ‘snake-thing’ については、“ He must have had a nightmare. ”<sup>4)</sup> という言葉で片づけてしまう。ところが、その後、この少年が訴えたと同じ恐怖が、年少の少年たちの間に、瞬く間に広がって行ったのである。そのため、最初は全く取り合わなかった年長の少年たちも、折りに触れてそれを話題にするようになる。

“ You’ve noticed, haven’t you? ”

...

“ Noticed what? ”

“ Well. They’re frightened. ”

...

“ I mean the way things are. They dream. You can hear ’em. Have you been awake at night? ”

Jack shook his head.

“ They talk and scream. The littluns. Even some of the others. As if —— ”

...

“As if”, said Simon, “the beastie, the beastie or the snake-thing, was real. Remember?”

The two older boys flinched when they heard the shameful syllable. Snakes were not mentioned now, were not mentionable.

...

Jack sat up and stretched out his legs.

“The're batty.”<sup>5)</sup>

彼ら年長の少年たちは、‘beastie’の存在を決して信じているわけではないのだが、年少の少年たちの尋常でない恐怖の様から、それを全く無視できない状態へと変化して行ったのである。そして、上記の引用からも明らかなように、“They are batty.”と結論づけながらも、彼ら年長の少年たちの間にも、すでに‘beastie’に対する恐怖は、正体なき恐怖として、徐々に浸透しつつあったと言えよう。

以上のような経緯から、Ralphは、彼らの共同生活がうまく行かなくなった原因として、まず第一にこの恐怖を考えたのであり、そう考えた彼は、この恐怖の正体を明らかにしようと試みる。ところが、実際のところ、beastなるものを見たという小さな少年たちの陳述は、具体性に欠けるものであった。彼らは、飽くまでbeastの存在を信じ、それは夜になるとやって来る、あるいは森の奥に潜むなど、皆一様に同じような見解を持っていた。それに対し、JackとPiggyは、それぞれ次のように述べる。

① Jack :

“... Only Ralph says you scream in the night. What does it mean but nightmares?...”

...

“The thing is — fear can't hurt you any more than a dream. There aren't any beasts to be afraid of on this island.”

...

“Well then — I've been all over this island. By myself. If there were a beast I'd have seen it. Be frightened because you're like that — but there is no beast in the forest.”<sup>6)</sup>

② Piggy :

“... 'Cours there isn't a beast in the forest. How could there be? What would a beast eat?”

...

“... Life,” said Piggy expansively, “is scientific, that's what it is. In a year or two when the war's over they'll be travelling to Mars and back. I know there isn't no beast — not with claws and all that, I mean — but I know there isn't no fear, either.”<sup>7)</sup>

しかしながら、果たしてこれが彼らの本音といえるだろうか。彼ら年長の少年たちは、このように beast の存在をはっきりと否定しながら、小さな少年たちの beast に対する恐怖を、すっかり取り除くことはできず、beast についての議論は、收拾がつかぬままに決裂してしまうのである。それ故に、むしろ彼らの本音は、次に引用する Ralph の言葉にこそ表わされているのではないかと思われる。

“I mean when Jack says you can be frightened because people are frightened anyway that's all right. But when he says there's only pigs on this island I expect he's right but he doesn't know, not really, not certainly I mean ” ... “I don't believe in the beast of course. As Piggy says, life's scientific, but we don't know, do we?”

Not certainly, I mean —” 8)

すなわち、彼らは、理論的、科学的に考えて、beastの存在など実際にはあり得ないことを十分に承知しているのではあるが、彼らの心の中には、そうした理論や科学では割り切れない何かが存在していると言えよう。言い換えれば、彼らの内に存在する「もしかしたら」という不確かな気持ちは、適当なきっかけさえあれば、彼らを恐怖の淵に転げ落とす可能性を十分に秘めていたのである。案の定、このbeastについての議論の直後に起こったある事件を契機に、彼らはすっかりbeastに対する恐怖の虜となってしまうのである。その事件とは、山頂で狼火の番をしていたSamとEricがbeastを見たと言って、Ralphたちの所へ逃げ返って来たことから始まる。

“ We’ve seen the beast with our own eyes. No — we weren’t asleep —”

...

“ It was furry. There was something moving behind its head — wings. The beast moved too —”

...

“ There were eyes —”

“ Teeth —”

“ Claws —”

...

“ The beast followed us —”

“ I saw it slinking behind the trees —”

“ Nearly touched me —” 9)

彼らは、山頂で木に引っ掛かっていたパラシュート兵の死体を見つけ、それを *beast* と思い込んだのである。ところが、彼らの報告を確認するために山頂へ登って行った Ralph, Jack, Roger の三人も、同様にそれを *beast* と思い込み、恐怖に駆られて逃げ返って来る。この事件から、少年たちは全員、*beast* の存在を疑う余地もなく信じるようになるのである。

それでは、彼らがこれほどまでに恐れ、また彼らの共同生活に大きな影響を与えている *beast* とは、一体何であろうか。彼らの言動から、それが闇に対する恐怖から来る妄想の産物であることは、容易に推察できる。彼らの言うところでは、*beast* は夜になると現われ、あるいは森林の暗闇に潜むということであり、また、実際に見た者はいないからである。見たと言っている者はいても、おそらくそれは、山頂での事件と同様に、何かを *beast* と思い込んだのことにちがいない。元来、人間は暗闇に恐怖を感じるものであり、その傾向は、大人よりも子供の方がより強いと言えよう。しかも、我々人間の文明は、火を得ることによって大きく発達したのであり、また文明の発達とは、この世に存在するあらゆる事物に光を与えることであると言っても過言ではないだろう。故に、文明社会から遠く離れたこの未開の無人島で、少年たちが暗闇に恐怖を感じることは、ごく自然なことと言えようし、その恐怖の程度は、未だ文明社会から離れたことのない我々には、想像もつかないほどであろう。結局、彼らは、突然文明社会から引き離されて未開の無人島へ連れて来られ、今までに味わったことのない恐怖を感じたため、それが闇に対する恐怖であることを認識しないままに、その恐怖の正体を外的世界に求めたと言えよう。そして、それを、いつのまにか *beast* として頭の中で形象化し、さらにその形象を実際に存在するものと信じ、かつ恐れたのである。ところが、彼らのうちでも、年長で思慮深い何人かの少年たちは、初めは理論や科学で、彼らのいう *beast* の存在を否定することによ

って、その恐怖から逃れようとしたのである。しかしながら、この未開の無人島においては、理論や科学という文明の力は、彼らにとって、強い味方とはなり得なかったのである。逆に、恐怖ばかりが彼らの内で次第に力を増して行き、遂には、山頂のパラシュート兵の死体を、beastとして見誤らせるほどになっていたのである。

このように、彼らのいう beast すなわち闇に対する恐怖は、彼らの共同生活に大きな影響を与えているのであり、しかもその影響は決して良いものではなく、むしろ彼らを悪い方向へ導いていると言えるのだが、そうした影響の中で、最も著しい変化を見せている Jack について言及したい。Jack は、島での共同生活が始まって以来、狩猟に異常なまでの興味を示し、食肉調達のために狩猟が必要であると主張し続けた。ところが、その彼も、初めて無抵抗の野豚に出くわした時には、それを仕留めることができなかった。

They found a piglet caught in a curtain of creepers, throwing itself at the elastic traces in all the madness of extreme terror.....Jack drew his knife again with a flourish. He raised his arm in the air. There came a pause, a hiatus, the pig continued to scream and the creepers to jerk, and the blade continued to flash at the end of a bony arm. The pause was only long enough for them to understand what an enormity the downward stroke would be. Then the piglet tore loose from the creepers and scurried into the undergrowth. They were left looking at each other and the place of terror.....

They knew very well why he hadn't : because of the enormity of the knife descending and cutting into living flesh ; because of the unbearable blood.<sup>10)</sup>

ここに述べられているように、Jack のナイフを空中に止めさせたのは、生きている物の生身を切り裂くことそして流血に対する嫌悪感である。こうした嫌悪感は、我々文明人ならば、おそらく誰もが持っているものであり、言い換えれば、Jack の持っていた文明性と言えよう。ところが、Jack 自身は、この文明性を自らの弱さと捉え、怒りにも似た自己嫌悪に陥ったのである。

“I was going to,” said Jack. He was ahead of them and they could not see his face. “I was choosing a place. Next time —!”

He snatched his knife out of the sheath and slammed it into a tree trunk. Next time there would be no mercy. He looked round fiercely, daring them to contradict.<sup>11)</sup>

そこで、彼は、次の狩猟に出かける際、自らの顔に色のついた粘土を塗り立て、迷彩を施すのだが、この迷彩は、彼にとって、単に迷彩であるという以上の効果を与えるものであった。

He looked in astonishment, no longer at himself but at an awesome stranger. He spilt the water and leapt to his feet, laughing excitedly. Beside the mere, his sinewy body held up a mask that drew their eyes and appalled them. He began to dance and his laughter became a bloodthirsty snarling. He capered towards Bill and the mask was a thing on its own, behind which Jack hid, liberated from shame and self-consciousness.<sup>12)</sup>

すなわち彼は、彼自身、弱さとしてしか捉えることのできない自らの文明性を、粘土の仮面の裏に押し隠したのであり、顔に粘土を塗りたくっ

た彼の姿は、まさに野蠻人そのものとなったのである。果たして、この迷彩が効を奏して、彼は野豚狩りに成功し、その成功に彼は狂喜するのであった。

He sought, charitable in his happiness, to include them in the thing that had happened. His mind was crowded with memories ; memories of the knowledge that had come to them when they closed in on the struggling pig, knowledge that they had outwitted a living thing, imposed their will upon it, taken away its life like a long satisfying drink.<sup>13)</sup>

この時初めて、彼は、生ある物を死に至らしめるということの本当の意味を、生身を切り裂くことや流血に対する嫌悪感を越えて、身をもって認識したのである。それは、彼にとって、生あるものを自らの意志のもとに屈服させ、支配することに他ならないのである。だからこそ彼は、野豚を首尾よく仕留めたことによって、自らの内に潜む支配欲を満足せしめ、その満足感に酔い痴れたのである。彼は、もともと合唱隊の隊長であり、またこの島における chief の役も自分こそが適任であると自負しているほどの少年であるから、支配する側に立つことに慣れている少年と言えよう。故に、彼の支配欲は、おそらく彼の意識上にあつたと考えられるが、彼の内には、もっと凄まじい支配欲が隠されていたのである。それは、最も究極的な意味での支配欲、すなわち生ある物からその生を奪うことによって相手を支配するというものであり、最も残虐な支配欲といえよう。しかしながら、この時彼自身は、自らの内に潜むその残虐な支配欲に気づいてはいない。彼はただ単純に、表面に現われた満足感に酔い痴れていただけであるのだが、彼の内面において、この残虐な支配欲は、無意識のうちに大きな力を得て行くのである。もちろんそ

れは、彼ひとりに限って言えることではなく、特に彼を中心に集まっていた何人かの少年たちの内面においても、同様の変化が見られる。彼らは、気づいていなかったからこそ、自らの内に残虐性を蔓延らせたのであり、何の抵抗も感じぬままに、まさに野蛮人のごとく変貌して行ったのである。そして遂に、Jack は、rule を守っていないと Ralph に指摘された時、次のように叫ぶまでに変貌してしまったのである。

“Bollocks to the rules! We're strong — we hunt! If there's a beast, we'll hunt it down! We'll close in and beat and beat and beat —!”<sup>14)</sup>

これはまさに野蛮人の叫びといえよう。しかしながら、彼にこのように叫ばせたものとは言えば、やはりそれは、彼らの言う beast すなわち闇に対する恐怖なのである。一見したところ、恐れを知らない少年のように見えるが、彼もまた、言葉では beast の存在を否定しながらも、得体の知れない恐怖に取りつかれていたのである。そして彼は、その得体の知れない恐怖に対し、力で抵抗しようとしていたのであり、それがこの言葉となって、彼の口を突いて出たと言えよう。彼は、一度目の狩猟において、粘土の仮面の裏に自らの文明性を押し隠した。すると、その代りに残虐性が表出して来たのであり、その残虐性は、彼の内で無意識の内に増大して行ったのである。結局、彼の内で残虐性を増大せしめたものは、恐怖だったのである。その証拠に、山頂のパラシュート兵の死体を beast と思い込み、彼らにとって beast の存在が現実のものとなり、皆が恐怖の虜となった直後に、彼は、残虐窮りない二度目の狩猟を行なうのである。

...the sow staggered her way ahead of them, bleeding and mad, and

the hunters followed, wedded to her in lust, exited by the long chase and the dropped blood...

Here, struck down by the heat, the sow fell and the hunters hurled themselves at her. This dreadful eruption from an unknown world made her frantic ; she squealed and bucked and the air was full of sweet and noise and blood and terror. Roger ran round the heap, prodding with his spear whenever pigflesh appeared. Jack was on top of the sow, sttabing downward with his knife. Roger found a lodgment for his point and began to push till he was leaning with his whole weight. The spear moved forward inch by inch and the terrified squealing became a highpitched scream. Then Jack found the throat and the hot blood spouted over his hands. The sow collapsed under them and they were heavy and fulfilled upon her.<sup>15)</sup>

この場面の描写は、実にリアルで生き生きとしている。彼らは、雌豚をいたぶることにセクシャルなものさえ感じているのであり、ここに描かれているのは、まさにサディズムの境地といえよう。まるで彼らにとっては、獲物は一匹の雌の野豚である以上に、単に一匹の雌であるかのような描き方がされている。しかしながら、彼らはまだほんの少年であり、ここで彼らが感じている欲情 (lust) を、いわゆる欲情として、彼ら自身どれほど意識していたかは疑問である。おそらく彼らは、それが何を意味するか、全く理解していなかったであろう。彼らをこのような残酷な行為に駆り立てているのは、彼らの内に存在する恐怖感であり、精神的には、むしろ彼らの方が追い詰められた獣であり、そうした一種の極限とも言える状態の中で、野豚をいたぶることによって、彼らは無意識のうちに一種のエクスタシーの域に達していると言えるのである。

彼らは、この後、仕留めた豚の頭を棒切れに突き刺し、beast への捧

げ物としてその場に残すのであるが、この彼らの行為は、彼らが *beast* を外的世界に存在するものと信じていることを、如実に表わしている。しかも、その *beast* を、今度はまるで神か何かのように扱い始めたのであり、このように、闇に対する恐怖を形象化し、それを崇めるという経緯は、まさに原始宗教の発生に匹敵するものと言えよう。そして、これを機に、Jack を中心とする少年たちのグループは、完全に野蛮化してしまうのである。

以上のように、Jack は、恐怖に対して力で抵抗しようとしたため、次第に野蛮化して行ったのであり、また彼の蛮性が増すに連れて、彼と Ralph との対立は激化して行き、遂に彼は、“I'm not going to be part of Ralph's lot —”<sup>16)</sup> という捨て台詞を残して出て行ってしまふ。結局、少年たちの一団は、Ralph に従う者たちのグループと、Jack に従う者たちのグループの二つに分裂したわけだが、少年たちは徐々に Jack のもとへと流れて行き、最終的に Ralph のもとに残ったのは、Piggy, Simon, Sam, Eric の四人だけであった。少年たちにとって、Jack の魅力は、その無軌道さであった。Jack は、彼の内に蔓延った蛮性の赴くままに、先のことなど考えず、ただ狩猟に熱中し、遊びに夢中になっていただけなのである。それに対し、Ralph は、最初から最後まで、秩序正しい文明人であろうとしたのであり、それが、次第に野蛮化して行った Jack と相容れなかった原因のひとつと言えよう。彼は、常識派でモラリストであり、chief に相応しい少年であったのだが、少年たちの間に広まって行った恐怖によって、楽園建設という夢を阻まれ、また彼自身、chief として、次第に窮地へと追い込まれて行ったのである。窮地に立たされて、初めて彼は、大人がいないということが、ただ単に自由であることだけを意味するのではないということに気づく。

“We're all drifting and things are going rotten. At home there was

always a grown-up. Please, sir ; please, miss ; and then you got an answer. How I wish!" ...

"If only they could get message to us," cried Ralph desperately.

"If only they could send us something grown-up...a sign or something." 17)

しかしながら、彼は、この島に不時着した時からすでに、大人の保護のものを離れていたのであり、もはや彼自身の力ですべての事に対処して行くしかなかったのである。結局、彼は、すべてを台無しにし、彼自身をもその虜としている恐怖に対して、良き友であり良き助言者である Piggy と共に、ただひたすら文明人であろうとすることによって、無言の抵抗を続けたのである。彼は、ただ恐怖を恐怖として受け取っていたのであり、他の少年たち同様、その正体を真に見極めようとする勇氣を持ち合わせてはいなかった。それ故に、彼は、Jack のように蛮性へと走ることはなかったのだが、恐怖に対しては実に消極的な態度を取らざるを得なかったのであり、ただ恐怖を避けるべく行動する以外、なす術はなかったのである。

ところで、唯ひとり、彼らを捉えていた恐怖の正体を見極め、それに對抗しようとした Simon のことを忘れてはならない。彼は、初めから、彼らの言う beast について、皆とは違った見解を持っていた。

"Maybe," he said hesitantly, "maybe there is a beast."

...

"What I mean is...maybe it's only us."

...

"We could be sort of..."

Simon became inarticulate in his effort to express mankind's

essential illness. Inspiration came to him.

“What’s the dirtiest thing there is?”<sup>18)</sup>

これは、Ralph を中心とする集会で、beast についての議論が行なわれた際の Simon の発言であるが、皆の嘲笑を浴び、彼は一言もなく引き下がらざるを得なかった。Ralph でさえ、Simon の真の意図を理解し得なかったのである。Ralph を初めとして、Simon 以外の少年たちは皆、beast の存在を外的世界にのみ求めていたのであり、誰ひとりとして自らの内面を覗こうとする者はいなかったからである。それ故に彼らは、Simon の発言の意味を全く理解できず、ただ彼を嘲っただけと言える。すなわち、Simon はこの時すでに、彼らが beast と呼んでいるものが、実は彼らの内に存在する闇に対する恐怖であることに気づいていたのである。だからこそ、その後、Jack たちが二度目の狩猟の後 beast への捧げ物として残して行った豚の頭と対面した時、その豚の頭すなわち蠅の王（*Lord of the Flies*）は、彼に語りかけたのである。

...in front of Simon, the Lord of the Flies hung on his stick and grinned. At last Simon gave up and looked back ; saw the white teeth and dim eyes, the blood — and his gaze was held by that ancient, inescapable recognition. In Simon’s right temple, a pulse began to beat on the brain.

...

“Fancy thinking the Beast was something you could hunt and kill!” said head. For a moment or two the forest and all the other dimly appreciated places echoed with the parody of laughter.

“You knew, didn’t you? I’m part of you? Close, close, close! I’m the reason why it’s no go? Why things are what they are?”

“I’m warning you. I’m going get waxy. D’you see? You’re not wanted. Understand? We are going to have fun on this island! So don’t try it on, my poor misguided boy, or else —”

...

“Or else,” said the Lord of the Flies, “we shall do you. See? Simon and Roger and Maurice and Robert and Bill and Piggy and Ralph. Do you? See?”<sup>19)</sup>

ここで初めて、少年たちの言う beast はその正体を明らかにするのである。つまり、少年たちが beast と呼んで恐れていたものは、ここで Simon に語りかけている 蠅の王 (Lord of the Flies) だったのであり、少年たちが外的に存在すると信じていた beast なるものは、実際には存在しなかったのである。そこで 蠅の王 (Lord of the Flies) は、すでにそのことに気づいていた Simon を邪魔者とみなし、彼に警告するのである。ところが、彼は警告に屈せず、少年たちが beast を見たと言う山頂に、勇敢にもひとりで登って行き、それがパラシュート兵の死体であったことを確認する。すなわち、彼は、少年たちのうちで唯ひとりの、真実を見極めようとする勇気を持った少年だったのである。しかし、こうしてはっきりと beast の正体を見極めた彼が、他の少年たちのもとへ報告に走ると、彼を待ち受けていたものは、 蠅の王 (Lord of the Flies) の警告通り、悲惨な運命であった。彼は森林から這い出して来たところを、真夜中の宴の最中であった少年たちに、beast と見誤られ、寄ってたかってなぶり殺しにされてしまうのである。彼を虐殺した少年たちというのは、Jack たちだけではなく、肉欲しさに宴会に紛れ込んでいた Ralph と Piggy も含まれていた。翌朝、自分たちが殺したものが、beast ではなく Simon であったことに気づいた Ralph と Piggy は、大きな衝撃を受ける。

“It was an accident,” said Piggy suddenly, “that’s what it was. An accident.” His voice shrilled again. “Coming in the dark — he had no business crawling like that out of the dark. He was batty. He asked for it.” He gesticulated widely again.

“It was an accident?”

“You didn’t see what they did —”

“Look, Ralph. We got to forget this. We can’t do no good thiking about it, see?”

“I’m frightened it, see?”

“I’m frightened. Of us. I want to go home. O God I want to go home.”

“It was an accident.” said Piggy stubbornly, “and that’s that.”<sup>20)</sup>

しかしながら、彼らにとっては、このように自らを慰め、現実から目を背ける以外に、なす術はなかったといえよう。

結局少年たちの生活を滅茶苦茶にし、果ては Simon 虐殺にまで彼らを駆り立てたものは、彼らの内に存在した恐怖心であり、またその恐怖心によって刺激されて表出した蛮性 (savagery)、すなわち我々人間の内面に潜む内なる悪 (inner evil) だったのである。それは、あらゆる人間の無意識下に潜んでいる内なる暗黒 (inner darkness) であるから、通常は意識の上に出て来ることはない。文明社会に生活する我々の意識上には、必然的にモラルが存在するのであり、それが内なる悪を無意識下に抑制しているのである。もし、何らかの刺激あるいはきっかけによって、内なる悪が表出して来た場合、やはり必然的にモラルとの葛藤が起こるはずである。ところが、このことはあくまで我々が考え得る文明社会において言えることであり、未開の無人島という環境のもとで、恐

怖心というものを媒介にして表出して来た少年たちの内なる悪すなわち蛮性の前では、モラルなど何の意味も持たないのである。モラリストであるはずの Ralph でさえ、恐怖心に動かされたため、Simon を beast と見誤って、殺してしまうのである。だからこそ彼は、翌朝、自分たちが殺したものが Simon であったことを知って、初めて大きな衝撃を受けたのである。

ところで、先にも述べたように、Simon 以外の少年たちは、Ralph や Piggy も含めて、誰ひとりとして、彼らの言う beast の正体を見極めようとせず、Jack を中心とする、蛮性を象徴する粘土の仮面と同化して行ったグループと、Ralph を中心とする、文明を象徴するほら貝を最後まで持ち続けたグループとに分裂し、まさに蛮性対文明とも言える対立を続けたのである。そして、この対立の外に、唯ひとり beast の正体を見極め、果敢にもひとりでそれに立ち向った Simon の存在があったと言えよう。しかしながら、文明社会から遠く離れたこの未開の無人島において、秩序、モラル、理性などあらゆる意味での文明性は、蛮性に対抗し得るほどの力を保ち続けることは、ほとんど不可能に近かった。逆に文明社会において、モラルによって無意識下に閉じ込められていた蛮性は、文明の力が弱まるに従って、徐々にその力を増して行ったのである。その結果、蛮性という内なる悪を認識し、それに対抗しようとした Simon は、その内なる悪によって虐殺され、内なる悪を認識するには至らなかったが、最後まで文明人であろうとした Ralph と Piggy もまた、手ひどい制裁を受けることとなるのである。まず先に、Piggy が、文明の象徴であるほら貝を抱いたまま、崖から突き落とされ、ほら貝もろとも粉微塵となる。次に唯ひとり残された Ralph は、Jack を初めとする他の少年たちによる執拗な追跡を受け、死に直面した極限状態の中で、必死の逃走を強いられるのである。少年たちは、まるで野豚でも狩り立てるように、Ralph を追跡したのであり、逃走する Ralph は、恐

怖の中で次のように考える。

Ralph moaned faintly. Tired though he was, he could not relax and fall into a well of sleep for fear of the tribe. Might it not be possible to walk boldly into the fort, say — “I’ve got pax,” laugh lightly and sleep among the others? Pretend they were still boys, schoolboys who had said, “Sir, yes, Sir” — and worn caps? Daylight might have answered yes; but darkness and the horrors of death said no. Lying there in the darkness, he knew he was an outcast.” 21)

彼はこの時、“I’ve got pax.” と言えばそれで済む子供の世界に、すでに自分がいないということを、身をもって体験したのである。しかし、彼はまだ自分の置かれている立場に納得が行かなかった。なぜ、“I’ve got pax.” と言っても許されないのか、なぜ自分だけがこんな目に合わなければならないのか、など様々な疑問が彼の脳裏をかすめたが、考えている暇はなかった。生きるために彼は逃げなければならなかったからである。必死の逃走の末、彼は遂に海岸へ追い詰められるのだが、その時、島から立ち昇った煙を見つけて上陸した海軍士官によって、救われるのである。そして、助かったことがわかって初めて彼には泣く余裕が出て来る。

For a moment he had a fleeting picture of the strange glamour that had once invested the beaches. But the island was scorched up like dead wood — Simon was dead — and Jack had...The tears began to flow and sobs shook him. He gave himself up to them now for the first time on the island ; great, shuddering spasms of grief

that seemed to wrench his whole body. His voice rose under the black smoke before the burning wreckage of the island; ... Ralph wept for the end of innocence, the darkness of man's heart, and the fall through the air of the true, wise friend called Piggy.<sup>22)</sup>

彼は、大人のいないこの未開の無人島に不時着したことによって、大人の保護のもとに安全を保障されているという一種のシェルターから放り出されたのである。そして、この無人島で生活を始めることによって、彼は自分の無力さを知り、大人の偉大な面を発見する。さらに、死に直面した極限的逃亡の中で、自分がもはやシェルターには守られていないことを、身をもって認識したのである。そして、最初に彼が、純粋な無垢な気持ちで夢見た楽園建設は、少年たちの内に潜む悪すなわち蛮性によって阻まれてしまったのであり、その経験を通して、彼は初めて人間の内なる悪の恐ろしさを認識したのである。この認識によって、彼はさらにもう一步、子供の世界すなわち無垢の世界から離れたといえよう。結果的に言えば、この島での経験は彼にとって、それが余りにも不幸な体験であったとしても、子供の世界から大人の世界へと成長する initiation の役目を果たしたと言えるだろう。

以上述べて来たように、この作品は、漂流物語という形式を取りながら、未開の無人島という特殊な状況において、人間の内なる悪が表出して来る様を描いたものである。しかも、結局のところ、その内なる悪に対抗し得た者は描かれていない。真先にそれを認識し、対抗しようとした Simon は命を落とし、また最後まで文明人としての誇りを貫き通した Piggy も同様に命を落とした。Piggy 同様文明人であり続けた Ralph は、かろうじて生き長らえたが、内なる悪に対抗し得るまでには至らなかった。要するに、Golding は、人間の内なる悪を、我々人間の力では対抗し難いほど強力なものとして描いているのであり、しかも

それを、単に個人的なものとしてではなく、集団的なものとして描いている。元来内なる悪とは、我々個々の人間の内面に潜むものであるが、それが表出し、集団となって結集した場合、極めて恐ろしいものとなり、我々人間が個人的に立ち向うことは、ほとんど不可能となるのである。最終的に、少年たちはイギリス海軍の巡洋艦によって救われ、内なる悪に支配されたこの忌まわしい島から脱出することができるのであるが、一見ハッピーエンド風に見受けられるこの結末も、実のところ、そう楽天的には受け取れない。なぜなら、彼らを救い出した大人たちもまた、内なる悪の集団的斗争とも言える戦争を行なっているからである。ここに、Goldingの二重のアイロニーを見ることができる。そもそもこの少年たちは、大人の行なっている「戦争＝殺し合い」を逃れて疎開する途中だったのである。そして、事故によって無人島に不時着したにせよ、そこは、生きるに困らない、戦争のない、絶好の疎開地であった。にもかかわらず、少年たちは、その楽園すなわち平和の島を戦場にしてしまい、殺し合いに明け暮れる。さらにその少年たちの殺し合いをやめさせ、殺されそうになった少年を救い出した大人も、海軍士官という、殺し合いを職業としている軍人なのである。ここに二重のアイロニーが見られるのである。結局、この作品には、真の救いというものが全く描かれていないのであり、それ故に、内なる悪の恐ろしさは、より強く我々の心に焼きつけられ、また暗い余韻を残すのである。

このように、Goldingは、内なる悪を集団的に描いているわけだが、ここに描かれている集団が、大人への成長過程にある少年たちの集団であることに注目したい。彼らはこの未開の無人島での生活において、二つの意味で楽園を失っている。ひとつは、実質的な意味での楽園、すなわち彼らがこの島に築こうとした現実の地上の楽園であり、もうひとつは、精神面でのエデン、すなわち無垢の世界である。彼らはその昔アダムとイブが一匹の蛇の誘惑によって楽園を失ったと同様に、内なる

悪、彼らの言葉で言い換えれば、beastあるいはsnake-thingの誘惑によって、この二つの楽園を失なったのである。楽園を自らの手で失楽園にしてしまった少年たちは、先に述べた二重のアイロニーが示す通り、正しく大人の鏡なのであり、そこに写し出されたこの物語は、アイロニカルな現代の神話と言えるのである。

〈註〉

- 1) William Golding, *Lord of the Flies* (London, Faber Paperbacks, 1980), pp. 37-38
- 2) *Ibid.*, p. 89
- 3) *Ibid.*, p. 39
- 4) *Ibid.*, p. 40
- 5) *Ibid.*, p. 56-57
- 6) *Ibid.*, pp. 90-91
- 7) *Ibid.*, pp. 91-92
- 8) *Ibid.*, p. 96
- 9) *Ibid.*, pp. 109-110
- 10) *Ibid.*, pp. 33-34
- 11) *Ibid.*, p. 34
- 12) *Ibid.*, p. 69
- 13) *Ibid.*, p. 76
- 14) *Ibid.*, p. 100
- 15) *Ibid.*, p. 149
- 16) *Ibid.*, p. 140
- 17) *Ibid.*, pp. 102-3
- 18) *Ibid.*, p. 97
- 19) *Ibid.*, pp. 152-59

20) *Ibid.*, p. 173

21) *Ibid.*, p. 205

22) *Ibid.*, p. 223

〈参考図書〉

- 1) Biles, J.J. & R.O. Evans (eds.), *William Golding, Some Critical Considerations* ( U.S.A., Univ. Pr. of Kentucky, 1981)
- 2) Greyor, J. & M.K. Weeks, *William Golding, A Critical Study* ( London, Faber, 1980)
- 3) Hynes, S., *William Golding* ( U.S.A., Columbia U.P., 1981)
- 4) Jonston, Arnold, *Of Earth and Darkness, The Novels of William Golding* ( Columbia, University of Missouri Press, 1980)
- 5) Medealf, S., *William Golding* ( London, Longman, 1975)